

アルベルティ『建築論』のドリス式柱礎における作図的記述の表現について

正会員 菅野 裕子*

アルベルティ 『建築論』 ドリス式柱礎

1. はじめに

本稿は、アルベルティの『建築論』¹の第七書第七章を再読する試みである。

『建築論』には挿図がないが、第七書第七章には幾何学的な作図の手順を辿るような記述があり²、読者は形を自分で考えながら読むことになる。その記述方法は、言葉だけで形を伝達できる点で挿図のない本において有利だったが、図がないゆえの問題も生じており³、文章と形との関係について、改めて注意深く読みなおすことは意味のないことではないだろう。

本稿では、第七書第七章におけるドリス式柱礎の高さに関する記述⁴を、原文の語順にも注意しながら、形と対応させつつ読むことによって、いくつかの論点を見出し、『建築論』に関する考察を深めるための一助とすることを目的としている。

2. ドリス式柱礎における記述とその読解

本章での手順は以下の通りである。まず、原文を図とともに読み、その流れを概観する(2.1)。次に、類似する表現がみられる4つの文を抽出し(2.2)、それらの文での長さを示す表現を整理し(2.3)、さらに文中の語順についても確認する(2.4)。

2.1 原文と日本語訳と図

① *Altitudinem autem totius basis divisere in partes tres, ex quibus unam dedere crassitudini latastri.*

さらに、柱礎全体の高さを三つの部分に分け、そこから二部分を方盤の厚みに当てる。

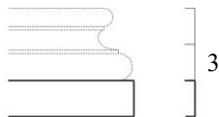


図1：①を示したもの（実線部分が方盤）

② *Fuit igitur totius crassitudo basis tripla ad crassitudinem latastri, et latitudo latastri quoque tripla ad crassitudinem basis.*

従って、柱礎の全体の厚さは方盤の厚さの3倍であった。

③ *Praeter latastrum, reliquum crassitudinis in basi divisere in partes quattuor, ex quibus summam dedere summo thoro.*

柱礎における、方盤を除いた厚さの残りを4つの部分に分ける。そこから、一番上を上の方盤に当てる。

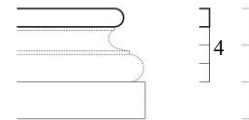


図2：③を示したもの（実線部分が上の方盤）

④ *Rursus illud crassitudinis in medio, quod inter supremum thorum et infimum latastrum sit, diuisere in partes binas, ex quibus infimam dedere infimo thoro, summam excavarunt orbiculo, qui inter ambos thoros interpressetur.*

さらにその厚さの中間の部分、すなわち上の方盤と下の方盤の間にある部分を2つの部分に分け、そこから下の部分を下の方盤に当て、上を溝付円盤として彫り込んだ。

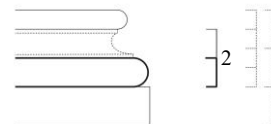


図3：④を示したもの（実線部分が下の方盤）

⑤ *Constat orbiculus ex canali interscalpto et duobus nextrulibus, quae limbos canalis ambiunt.*

これらの二つの円盤の間にはさまれた溝付円盤は円管の内側のように彫りくぼめた曲面と二つの平縁とからなり、後者は溝彫りの両縁を回る。

⑥ *Nextrulo septimum spatium dedere, reliquum subexcavarunt.*

平縁に1/7部分をあて、残りは彫りくぼめられた。

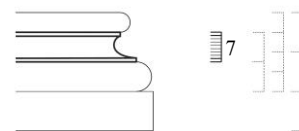


図4：⑤と⑥を示したもの（実線部分が溝付円盤（曲面と平縁））

以上、①から⑥では、柱礎全体の高さから分割を段階的に繰り返すことによって、方盤、上下の方盤、溝付円盤、平縁の長さを定めている。長さは、相互に入れ子のような関係になっている。

2.2 表現の類似する文章

原文の表現には、次のような類似性がみられる。すなわち、「ある大きさを分割し (divisere)、そこから (ex quibus) ある長さのある部位に当てる (dedere)」という表現が、①、③、④の3箇所で見られる。また、⑥では「分割し

(divisere)」という語はないが、①や③と同じ「当てる (dedere)」という句がみられる。

2.3 長さを示す表現

①、③、④、⑥の文中において、何の長さをどの部位に当てる(割り当てる)のか、という対応関係をみると、前者の「基準とされる長さ(A)」が対格、後者の「定められる部位(B)」が与格となっている⁵。各文章における両者については、表1で一覧した。

表1

	A: 基準とされる長さ (対格)	B: 定められる部位 (与格)
①	unam (その一つ)	crassitudini latastri (方盤の厚み)
③	summam (一番上)	summo thoro (上の円盤)
④	infimam (下の部分)	infimo thoro (下の円盤)
⑥	septimum spatii (七分の一の長さ)	nextrulo (平縁)

「基準とされる長さ(A)」の表現は、次の2種類に分類できる。

- (1) 作図上の部分を示す語(③summam, ④infimam) 語自体は位置を意味しており、長さの意味はない。文中では、作図上での具体的な位置を示し、それによって長さを示しているの、長さは作図上の部分と不可分である。
- (2) 数えられた長さ(①unam, ⑥septimum spatii) 語自体には作図上の位置を特定する意味はない。長さは数えられたものとして表現されている。

「定められる部位(B)」の表現は、次の2種類に分類できる。

- (1) 部位名称そのもの (③summo thoro, ④infimo thoro, ⑥nextrulo)
- (2) [部位名称]の長さ(①crassitudini latastri)

2.4 語順

①、③、④、⑥において、「基準とされる長さ(A)」と「定められる部位(B)」の文中での語順をみると、①、③、④では、「基準とされる長さ(A)」が「定められる部位(B)」に先立ち、⑥では逆になっている(表2)。

表2

①	[...] unam dedere crassitudini latastri.	長さ(A)→部位(B)
③	[...] summam dedere summo thoro.	長さ(A)→部位(B)
④	[...] infimam dedere infimo thoro [...].	長さ(A)→部位(B)
⑥	Nextrulo septimum spatii dedere [...].	部位(B)→長さ(A)

3. 考察

前章で確認したことから、以下の3点が指摘できる。

- (1) 「基準とされる長さ(A)」として、語自体が作図上の部位と不可分だった文(③、④)では、「基準とされる長さ(A)」が「定められる部位(B)」の文中の語順も、何らかの長さを図上に記しそこに具体的な形を描くという、

作図上の順序と一致している。

- (2) 文中の語順で「基準とされる長さ(A)」が「定められる部位(B)」のあとに置かれる文(⑥)では、文中で「基準とされる長さ(A)」を導く過程が説明されていない⁶。
- (3) 「定められる部位(B)」が「[部位名称]の長さ」という表現である文(①)では、「基準とされる長さ(A)」として、「数えられた長さ(unam)」が対応している⁷。

4. おわりに

本稿で扱った『建築論』のドリス柱礎に関する記述では、「長さ」や「形」に関する情報が、線的に進行する文脈の中で語られている。その中で、作図上の部位と不可分の語は語順においても作図と一致するなど、長さの表現は文脈に沿っていることが確認できた。本稿で見出した論点の中には、まだ十分に考察できていないものもあるが、今後、他の章も読み進めながら検討していきたい。

1 レオン・バッティスタ・アルベルティ、『建築論』、相川浩訳、中央公論美術出版、1982。(ラテン語原文は、Leon Battista Alberti, *L'Architettura (De re aedificatoria)*, testo latino e traduzione a cura di G. Orlandi, introduzione e note di P. Portoghesi, Milano, Polifilo, 1966.)

2 『建築論』における幾何学的な表現に関して、カルポは、古代や中世における口伝による伝承形式との関連性について指摘している(Mario Carpo, *Drawing with Numbers: Geometry and Numeracy in Early Modern Architectural Design (Journal of the Society of Architectural Historians, Vol. 62, No. 4 (Dec., 2003), pp. 448-469)*.)

3 たとえば、ドリス式柱礎やイオニア式柱礎において、基準となる柱径を apofige と cinta のどちらでとるかは文章では説明されていないが、その違いによって柱礎の細部のプロポーションも異なる。G. Morolli - M. Guzzon, *Leon Battista Alberti: i nomi e le figure, Ordini, templi e fabbriche civili: immagini e architetture dai libri VII e VIII del De re aedificatoria*, Firenze, Alinea, 1994, pp. 52-56.

4 本稿では、ドリス式柱礎の高さ方向の説明にあたる、「さらに、柱礎全体の高さを / Altitudinem autem totius basis」から「残りは彫りくぼめられた。/ reliquum subexcavarunt。」までを扱う(アルベルティ、前掲書、p. 199 / L. B. Alberti, cit., pp. 569-571. 以下、本稿では引用ページ数について、「日本語訳/ラテン語原文」の順に記す。ただし、本稿の日本語訳は基本的に『建築論』相川浩訳によるが、部分的には、直訳に近い表現に改訳した。また、引用文に付した番号とアンダーラインは筆者による)。

5 2.1 の引用文中で、該当の「基準となる長さ(A)」(対格)にシングルのアンダーライン、「定められる部位(B)」(与格)に2重線のアンダーラインを付している。

6 この語順は『建築論』第七書第七章、第八章、第九章における、モドゥルスを用いられる文にもみられるが、このことは、数えられた長さが作図のプロセスから分離されていることと一致しており興味深い。

7 本稿の範囲では、この組み合わせは①でのみ見られるが、これ以降でも「[部位名称]の長さ」という表現は、同様に、unam や duas といった語と対応している(そのうちの一つを方盤の厚さに当てた / unamque ex his dedere crassitudini latastri (アルベルティ、前掲書、p. 200 / pp. 571-573.)。そのうちの二つを下方の円盤の厚さに当てた。/ atque ex his duas dedere crassitudini imi thori (p. 200 / p. 573)。

図版出典：本稿の図はすべて筆者による